今週の
倫理
6月のテーマ ｜ 自覚
2023.6.17～6.23
1338号

従業員の勤務態度に映し出される経営者の心

企業経営には予期せぬ事態が起こりうるものです。その時、トップである経営者の心のありようが組織を左右します。

K氏は九十九の病床を持ち、一四〇名のスタッフが働く病院の院長です。優しさと思いやりの心で患者と向き合い、地域から信頼される病院を目指しています。

令和四年七月、新型コロナウイルスの感染拡大により、近隣の病院にクラスターの発生が確認され、K氏はコロナの脅威が自身の病院にも迫っていることに危機感を募らせていました。

そしてついに、院内で初めて患者の二名からコロナの陽性反応が出たことを担当医から報告されたのです。これまで院内で感染者が出ていなかっただけにショックは大きく、〈クラスターに発展してしまうのではないか〉との不安が頭をよぎります。心には余裕がなくなり、表情からも明るさが失われていきました。

二日後、K氏は倫理法人会主催の講演会に参加しました。その中で講師は「苦難はその人をよりよくし、より向上させるために起きてくるのです。だから苦難を嫌がるのではなく、喜んで、明るく前向きに受け止めることが大切です」と、苦難の受け止め方について話してくれました。その言葉にK氏は、日頃、倫理法人会で学びながらも、今の状況を前向きに受け止めることが出来ていないことを深く反省したのです。

その後、院内では感染が拡がり、クラスターが発生。スタッフは通常業務に加え、家族への連絡や防護服を着用した感染予防などの対応に追われ疲れている様子でした。

K氏は〈自分が不安な心、暗い表情でどうするか。こんなときだからこそ、院長である自分が苦境を前向きに受け止める姿勢を持とう〉と心を切り替えたのです。

それからは、スタッフと接するときは笑顔を絶やさず、前向きな言葉をかけることを心がけました。「大変な状況ですが、これは一時的なもので必ず終息します。この経験は今後の私たちの仕事に生きるはずです」と励まし続けたのです。

するとスタッフも、コロナ禍という国難に立ち向かうこの状況に、使命感を持ち、それぞれの役割に取り組んでくれました。結果、クラスターは予測していたよりも早く終息に至ったのです。

大変な状況にある時こそ、明朗な心で仕事に取り組む姿勢が重要であることを自覚したK氏。今では起きた問題に対して、社内体制改善のチャンスであると前向きに受け止めながら、今後どのような事態が起きても対処できるように取り組んでいます。

経営者の心は、従業員の働く姿勢に影響を与えます。社風や勤務態度は経営者の心を映す鏡なのです。

純粋倫理の基本実践のひとつに「明朗」があります。明るく朗らかになるような出来事があるから明朗になるのではなく、明朗な心になるからそれにふさわしい状況が生まれます。だからこそ、苦しい時ほど明るい心でいることが重要なのです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局